

平成26年度中学校武道授業（剣道）指導法研究事業 深められる指導法、「導入」から「攻防の展開」「評価」へ



平成26年度中学校武道授業（剣道）指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館・（一財）全日本剣道連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省〕が、平成26年6月27日～29日の3日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターにおいて、研究者19名、日本武道館事務局3名により実施された。

この事業は、部活動とは違い柔軟で多彩な指導が求められる授業において、すぐにも活用でき、しかも剣道の本筋へ生徒を導き、正しい評価の下せる指導法を求めて、全国から研究者が参集し、実技を含め協議検討するもの。成果は、この事業と同じ主催、後援団体によって実施されるブロックの指導者研修会などを通じて伝えられる。平成21年度に始まり、毎年この時期に行い、6回目となる。

■1日目（6月27日）

開講式後、記念写真を撮り、初めに小久保昇治研究者が平成25年度全国剣道指導者研修会の報告を行い、併せて参加者に対し行っ

たアンケート調査の結果も報告した。研修会を通しての反省事項として、「言葉は簡潔に」「抑揚のある言葉の使い方を心がける」「専門用語は説明を加える」等であり、剣道授業を行う上での今後の配慮事項が述べられた。同調査結果は研修会の内容に寄せられた賛辞、好評が殆どで、体育の内容がマット運動に移っても跳んだ後「ザンーシン」と残心をとった子が居たなどのエピソードが紹介された。



各ブロック研究者による報告会

続いて追田靖之研究者による月刊「武道」掲載による剣道授業実践報告（2009年5月号）の後、各県研究者の報告会となった。佐藤義則研究者より事前に各研究者に対し〔（1）「本校または本県の武道授業の現状と課題について」（2）「全国剣道指導者ブロック研修会に

望むこと」]の資料提出依頼を行っており、各ブロック研究者がそれに応じた資料を提出し報告を行った。生徒が眼鏡をつけて防具着用する、チャンバラごっこが始まってしまう、対人動作になるとけんか腰になるなどに注意している（青森県・田澤綾乃研究者）。ある教員の「剣道は専門でない」との言い方に対し県教育委員会から言表の指導があった、教員の半数が地元国立大出身者で、その大学では柔道しか教えていないので剣道採用が少ない（山梨県・出羽勝頼研究者）。導入部はいいのだが、4時間目くらいを過ぎると生徒のモチベーションが落ちてくる、「楽しい剣道」から次のステップを知りたい（石川県・中井秀人研究者）等、各県で実際に生じた事例や事実の報告となった。

最後に全員で小久保研究者の指揮のもとリズム剣道を行った。音楽をかける前に、相対で元立ちが竹刀を横に支持し、それを前進し打つ（やーと発声）→後退し残心。その際、通常の素振りと同様に右手に力を入れず左手を意識し心地よい強さで振り下ろすよう注意があった。

■2日目（6月28日）

初めに山神眞一研究者がゲームの要素を取り入れた体ほぐしの運動行い、「『息を合わす』ことを心掛けるようにすること。これには『相手の動きに応じる』という要素も入っています」との留意点があげられた。山田博子研究者より段階的に剣道のような動作につながる「新聞切り」、等の楽しい動機付けが行われ、「ボール打ち」では「ボールの中心をとらえ、ほどよい強さで打つこと」との留意点があげられた。軽米満世研究者は剣道に必要な動きづくりを行った。剣道の学習指導計画では毎時

間新しい動きを取り入れること、攻防の展開を常に意識することとの留意点があげられた。有田祐二研究者が伝統的な行動の仕方について指導法の発表を行い、続いて山神研究者が座礼、帯刀、構え、素振り、基本打突といった相手の動きに応じた基本動作の指導法を行った。大切なことは「相手とシンクロすること」とのことである。



軽米研究者による学習指導計画の説明

次に研究協議が行われた。追田研究者より「新聞切り」をよりうまく切る工夫として、「あらかじめ切れ目を入れておく」「新聞を床に対し垂直でなく、斜めに持つ」などが紹介された。軽米研究者より「切ることが目標ではなくそれが剣道のどこにつながるのかを教師が理解しなければならない」との留意点があげられ、教材づくりとして新聞刀、ペットボトル刀等が紹介された。佐藤研究者より、「教具、対人の工夫によって子供の学習意欲が高まります。剣道らしさをもとめるあまり、言葉がわからず、授業が理解できないことにならないように、授業を理解させるために工夫すること」とのまとめがあった。小久保研究者より安全確保のため、「新聞切り」で竹刀を振る生徒の背後に人を行かせないようにと、忘れがちな注意点の指摘があった。

山神研究者より「コミュニケーション力と人材育成の極意」との講話を行った。「生徒指

導、社会生活で一番大切なのは、3つのかけるである「気にかかる、目にかかる、声にかかる」。指導では、相手を自立させ、能力をいかに引き出すか大切である。

午後は、「木刀を活用した場合」を想定した木刀による剣道基本技稽古法の基本1～6または9の実技を行った。他の実技と同様に段階的な指導が必要である。木刀を使用する場合は常に緊張感をもつこととの安全に配慮した注意点が加えられた。(下諸純孝・花澤博夫研究者)

実技4「剣道具(防具)のある場合」では、有田祐二研究者より生徒が面倒くさい事柄も器用にできるようになることを実感できるように心掛けてほしい。また、佐藤研究者から剣道具のにおい、メガネの保管場所も配慮するように。ペアで着装の確認をさせるようになどの注意があった。剣道具を着けても手の内の柔らかさ、力まない打ちは大切。ここでもリズム剣道は生きてると、また打った後の「残心」の重要性も指摘された。剣道具を外すときも籠手を左右どちらから外すかその謂れとともに説明が加えられた。

学習指導要領では3学年の内容になる相手の変化に応じた基本動作を、剣道具を着けて行った。(花澤・百鬼研究者)

2日目の最後の実技は様々攻防の展開となった。重要なポイントとして、試合者は残心まできっちりで行うこと。審判は始め、交代等きちんと言葉を発し、試合者に対し良かった点、悪かった点はどうすれば改善されるのかを説明すること。審判になった生徒が見取り、理解し、評価を試合者に説明できるようになることが大切。指導者は競争させることは勝つためだけでなく、向上心を喚起し上達させるために行うことを理解すること等が挙げら

れた。(軽米・山田研究者)

■3日目(6月29日)



百鬼研究者による武道等指導推進事業の概略説明

百鬼研究者より、文部科学省委託事業「平成26年度武道等指導推進事業」の概略説明がなされた。文部科学省も剣道の組織力を評価している。本年3月に同事業が採択され本年度実施となった。事業内容は、安全で効果的な剣道事業の展開ダイジェスト版の作成と配布(全国の中学校と教育委員会)。もう一つは授業協力者データベースの運用である。大まかな流れは、授業協力者を各地域で募り、養成協力講習会を実施(8月から11月頃を予定)。授業協力者は退職教員、警察官OB、社会体育指導者等で60歳以上が約7割、6段以上の高段者が約8割である。各都道府県に中央オリエンテーションを受けた2名のコーディネーターを配置し、その地域の授業協力者のデータベースを管理する。そのデータベースは全日本剣道連盟と共有され、コーディネーターが地域の実情に応じた適切な協力者を各市区町村教育委員会に推薦し、それを通して地域の中学校に紹介される。この事業が成功するため、一つには、授業協力者は各学校の方針に従い支援協力の立場にあることを自覚すること。そのことは養成協力講習会でも強く発信したい。2つ目はコーディネーターの人選

を誤らぬことである。コーディネーターは学校教育に深い理解を持ち、人脈が豊かでないとならないと述べた。また、昨年度の同事業のアンケート調査では、担当教員はほとんど授業協力者に派遣してもらい効果があったと回答しているとの結果が加えられた。

続いて小久保研究者による「体罰・暴力によらない指導のあり方」講義が行われた。文部科学省より平成25年3月、体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について、5月には運動部活動の在り方調査研究報告書が通知された。同報告書では体罰等の許されない指導の例が提示された。殴る、蹴る、限度を超えた肉体的・精神的負荷、パワー・セクシャル・ハラスメント等。体罰は恥ずべき行為であると同報告書は通知している。最後に小久保氏本人が学校長であった頃の事例をもとに体罰が起こった場合大切なことは、学校の初期対応であると力強く説明、教育は本人を褒め認めることであるとまとめた。

軽米研究者より評価について説明があり、最後の研究協議となった。評価では、地域の学校剣道連盟が昇級審査していいのかの質問に対して、級審査は地区の審査委員が行い、全日本剣道連盟が認める。授業協力者も評価するのかの質問に対して、授業協力者は生徒の評価は行わない。県の教育委員会と文部科学省の連絡は密接に行われているのかの質問に対して、下から突き上げないと行けない、現場から声をあげる必要があるなど各県の研究者から質問が飛び交い研究協議がなされた。

閉講式では、研究者講評として、佐藤研究者より各研究者は本研究会で学習した内容を今後、県教育委員会・学校等に広め、各地域の講師となってほしい。代表挨拶として小久保研究者より、全国剣道指導者研修会のプロ

ックの講師としても今後がんばってほしいとの挨拶があり3日間のすべてが終了した。



研究者

小久保昇治（全日本剣道連盟 審議員・全日本学校剣道連盟学校副会長）

百鬼 史訓（全日本剣道連盟 評議員、普及委員会学校教育部会委員長）

佐藤 義則（全日本剣道連盟学校教育部会主任）

花澤 博夫（私立東大谷高等学校 非常勤）

軽米 満世（袖ヶ浦総合教育センター教育研究指導員）

山神 眞一（香川大学教授・教育学部長）

有田 祐二（筑波大学准教授）

山田 博子（宇都宮市教育委員会指導主事）

本間 哲善（江別市立江別第三中学校 教諭）

田澤 綾乃（青森市立浪岡中学校 教諭）

追田 靖之（小山市立小山第三中学校 教諭）

出羽 勝頼（富士吉田市立吉田中学校 教諭）

中井 秀人（中能登町立中能登中学校 教諭）

林 隆（岐阜市立精華中学校 3 学年主任）

山口 達也（滋賀県守山市立守山中学校 教諭）

杉村 正樹（安来市立第一中学校 教諭）

坪田 朋也（愛媛県松山市立内宮中学校 教諭）

泥谷 浩司（都城市立妻ヶ丘中学校 教諭）

◇日本武道館事務局（順不同・敬称略）